住まう 9

「ホーム」と呼べる関係をつくる住まい 後編

社会福祉法人グリーンコープ 抱樸館福岡（福岡県福岡市）

館内のカフェは誰でも利用できる"出会いの場所"

3回目の今回は、抱樸館が大切にしていることと、将来について館長の青木康二さんに聞きました。

地域の一員として暮らす

ホームレス支援施設の中には10人で雑魚寝する部屋など、「路上で寝るよりはマシ」という環境の施設があります。抱樸館は、国基準の倍の広さの個室、大きな窓、無いに等しい低い柵、開け放たれた玄関など、誰でも出入りできる雰囲気があります。ホームレス生活を強いられていた人々がひっそりと隠れるように暮らすのではなく、地域の一員として暮らしていく、そんな想いが伝わってきます。

「開放的にしたことで不都合は何もありません。ここが出会いの場になればいい。『仕事もしないで昼間から酒を飲んで寝ている』など、ホームレスの方への印象って悪いことが多いですよね。それを変えるためにも、同じ人間として普通に暮らしている場面で接点を持ってほしい。野宿のときではなく、働いているとき、普通に暮らしているときに出会える。この場所がそんな出会いの場所、地域の『ホーム』になればいいですね」

館長の青木康二さん

抱樸館発の地域づくり

3年間で520人の方が抱樸館を利用しました。一人ひとりの事情を聞く中で、「ホームレスになった原因はあなたにある。あなたが悪い」といえる人はいませんでした。

「社会の仕組みがホームレスを生み出しているということを発信できる場所になりたい。原因は自己責任ではない。だから助け合っていくことが大切だと伝えることができる場所になりたい。単に住まいを提供するのではなく、地域づくりをしたいんです。抱樸館発の地域づくりをしたい」

助けられた人が、次は助ける側になることも大切にしています。職員はお世話係、入居者は元ホームレスという関係だと、職員の側に圧倒的な力がある関係が固定化されてしまいます。助け・助けられの関係です。抱樸館ではたくさんの元入居者がボランティアとして活躍しています。

（編集部）

元入居者が訪れることも

開放的な中庭が見渡せる交流スペース。将棋や卓球なども楽しめます

自分は抱樸館を第二の故郷だと思い、抱樸館に育てられたと思っています。みんながあったかいんです。みんなが味方になってくれる。みんなが励ましてくれる。抱樸館にいたことを誇りに思っています。

ファイバー※に入ったのは、ドキュメンタリー番組で小さな子どもが銅線を焼いてお金に変える場面を見て、自分にも何かできるのではないかと思っていた矢先にファイバーの説明会があり、『これだ！』と思ったことがきっかけでした。今週からファイバー勤務が週5日になります。小さな子どもたちが手・足に火傷を負いながら家計を手助けしているのに、負けていられませんよね。

自分にとって抱樸館はなくてはならない存在だと確信しています。これからも頑張って生きていきます。

インタビューしたAさんから「上手く伝えられなかったこと」と題するお手紙が届きました。Aさんは路上生活を経て抱樸館を退居後、地域で生活しながらボランティアで抱樸館に関わっています。

※ファイバーリサイクルの略。古着のリサイクル事業で、抱樸館入居者の就労訓練の場になっている。詳しくは前号参照。

厨房スタッフが"手作り"の食事を提供します

「一般社団法人 抱樸館を支える会」では賛助会員を募集しています

賛助会費は一口 1,000 円。住所・氏名を記入の上、下記までお振込みください。

ゆうちょ銀行口座：01710-0-123003

詳しくは、「抱樸館を支える会」事務局（抱樸館福岡内）まで。

青木館長への講演依頼も下記へご連絡ください。

TEL：092-624-7771